

第 1871 回 定例研究会報告要旨 (11 月 20 日)

これからの農村社会理論

(明治大学) 大内 雅利

日本の農村社会はさまざまな困難を抱え、村落研究者はそれらに果敢に挑戦している。しかし現状は散発的な試みで、その場その場では妥当しようが、従来のイエムラ論に代わるような統一的な理論の構成には達していない。以下は一つの提案である。

理論のレベルとして、農村、国内 (都市農村関係)、世界システムという三つの層を想定する。そしてこれら 3 層を支えるのが土地である。農村、国内、世界という三つの社会圏が、土地を覆い包むように、積み重なっているというイメージである。3 層にはそれぞれ固有の分析枠組があり、同時にあいまって農村社会の分析に立体感を与えよう。

ここで土地を共通基盤としたのには相応の理由がある。一つには、グローバル化や都市化を、人・カネ・モノ・エネルギー・情報の移動性の高まりとするならば、その対極にあるのが動かない、あるいは動けない土地である。そして両者の溝はますます拡大し、問題は複雑になってきた。

もう一つは、土地の意味内容に関わる。従来は経済的には地代が、法的には所有権が、土地問題の焦点であった。しかしグローバル化の進む現代、その意味圏内には、自然・風土・農法・村落・慣習・実体など多彩な要素が引き込まれ (大内、磯辺俊彦著『共の思想』書評、村落社会研究, No.14, 2001), 土地は概念的な豊饒性を加えつつある。

さて農村のレベルにおける土地の問題は、現代日本においては、小地主と大小作という形であらわれる。これは戦前の大地主と小作に対応させた表現であるが、今風には土地持ち労働者と大規模借地農となろう。これは農地改革による戦後自作農体制を出発点とし、日本経済の高度成長によって兼業化と離農が進み、昭和ヒトケタ世代の退場とともに、完成する。そこに浮かび上がる農村は、小土地所有者の大海に漂う大借地農業経営体である。両者の力関係はいずれは逆転するかもしれないが、今のところ漂流しているのは大借地農業経営体である。

そこで問題は農村のイメージである。例えば農村の構成主体をどのように社会的に規定するのか。農村とは小地主の居住地域なのか、大小作の生産地域なのか。このような状態で、「もと農村」「昔の農村」はどのように呼べばよいのだろうか。

国内レベルでは土地をめぐる都市農村関係として議論できるだろう。それは歴史的に、農本主義・近代主義・環境主義というように並べると、分かりやすい (大内、農本主義・近代主義・環境主義, 明治薬科大学研究紀要, 第 25 号, 1995)。農本主義は近代化への農村住民の対抗イデオロギーとして成立し、近代主義は都市住民が農本主義を克服する導きの系となった。これらに対して、環境主義は都市住民による近代主義の克服であり、農本主義の再評価である。環境問題が都市住民を動揺させ、解決策を求めて農村へと駆り立てる。もっとも都市住民は近代主義をきっぱりと拭き捨て、農本主義に改宗するわけではない。都市住民と農村住民の間には厳然とした齟齬がある。

藤村美穂は阿蘇の「草原の危機」をめぐる「都市と農村の微妙なずれ」を指摘した (環境問題とむら研究, 日本村落研究学会第 49 回大会, 2001)。その背後にあるのは、「草原の危機」への都市住民の関与意欲であり、農村住民の草原管理能力の低下である。土地利用の空白状態が都市住民の環境主義的な意識を刺激し、行動へと促した。

さらに積極的には、イギリスにおいては一般公衆の田園アクセス権として実現している (岩本純明, 公共空間としての入会地——イギリスの経験——, 村落社会研究, No.9, 1998)。これは従来の所有や借地に限られた権利状態から踏み出ている。

世界システムのレベルでは、土地の空間的な位置が焦点となる (大内、世界システムに組み込まれる日本農村, 明治薬科大学研究紀要, 第 24 号, 1994)。農村は世界経済のなかに位置付けられつつある。経済のグローバル化は農村経済の二つの基盤を揺さぶる。農産物の自由化による価格低下と、地方経済の空洞化による労働賃金の停滞を通してである。かくして世界都市を頂点とする階層構造は農村という末端にまで及ぶ。

ここでは Centrality と Locality, Core と Periphery という、土地の空間的な位置関係が意味をもつ。さらには Centralization と Localization, そして Core 化と Periphery 化もまた進行しよう。Localization が自らのアイデンティティを確認しようという地方住民の積極的な行動であるとすれば、Periphery 化にはアイデンティティを奪われる周辺主体の苦悩が内包されている。

以上は一つの提案である。土地から農村社会理論を構成する試みは、新しい可能性をほらむ。